

ニーナ・コトワ

音楽家がヴィジュアル的な面を強調するのは意味がない

予定されていたインタビューのスケジュールが急遽変更になった。なんでも、本番を前にしてインタビューをおこなうことに、落ち着かなさを感じたらしい。やはり日本で、最初到大勢の目の前で演奏するにあたって、少しでも多く練習をしておきたい。自分は音楽家なのだし、ひとと話をするよりはまずいい演奏をしたい……。直接本人がそう語ったわけではない。だが、この若い女性チェリストの緊張はおのずと伝わってきた。

手元にあるアメリカ製のジャケットで、ニーナ・コトワの目はまっすぐ正面を向いている。細く、両足を少し上げめに揃えた脚。きつそうな眼差し。広い額。姿勢はといえば横から斜めといったかんじ。奥にある左手はチェロに添え、前面の肩は、ドレスなのかそれともローブなのだろうか、心持はだけている。全体は紫がかっており、けっして派手ではないのだが、光の当たりかあいによって、なにがしら記憶にのこるものがある。

元スーパー・モデルで、チェリスト。日本の有名女性誌の表紙にも何度も登場している。しかもただ演奏するだけではなく、作曲や編曲も手掛けるという人物。興味深いのは旧ソ連=ロシア出身で、モデルになったのはアメリカだったという事実。父親イヴァン・コトフ——いうまでもない、ロシア語では姓が男性/女性で変化するもので、ニーナと父は若干ちがった姓になる——はコントラバス奏者だった。1973年にはジュネーブ国際コンクールで賞を受けている。旧ソ連時代は良く知られた人物だったという。

「そう、おっしょるとおり父はコントラバス奏者でしたし、母はコンサート活動はしていませんでしたけれども、モスクワ音楽院で教えていたのです。でも、代々音楽家を輩出した、音楽一家だったかというと言語があります。祖父は科学者でしたし、彼が奥の部屋でむすかしい、私にはまるっきりわからない本に埋もれていたのが記憶に残っています」

かならずしも愛想のいいタイプではない。比較的温厚そうにして

NAOHIKI FUWAKAGE



いるのだが、深りだすと、けっしてはやいテンポではなく、とつとつと説明を加えてゆく。ニーナには、顔をあわせた途端ににこにこ笑顔で、すぐに握手をしようと右手をさしだしてくる——そうしたほとんど無意味な「アメリカ的愛想の良さ」がない。

「チェロを始めたのは6歳のとき。2週間ほど弾きこんで、人前で演奏する機会がありました。まあ、親にアイスクリームでつられたようなものですけど(笑)。そして1年くらい経ってから、今度はモスクワ音楽院成人クラスに入りました。はじめて受けた賞は、15歳、ブラ八国際コンクールに出場したときでしたね」

声が小さい。しかも手にもったコーヒーカップを見ながら話す。「18歳でロシアを離れました。父が亡くなったからです。ケルンの音楽院を受験し、留学することが決まり、それからイェール大学のスカラシップを受けて、アメリカに移りました。モデルの仕事はそのころにやったのです。仕事とチェロの練習を両立するのは、ほんとうに大変だった。だから、音楽でやっていくことに成る程度目処がついたときは、きっぱりモデルをやめることができました。未練? それは全然ないですね」

ここで、少し「モデル」という仕事をめくって話してもらおうと思った。最近、クラシック界においても、多分に視覚的な側面がクローズアップされているし、そうした傾向は元スーパー・モデルだった彼女の目からはどのように見えるのかを知りたかったのだが——意外なこと、こうしたヴィジュアル面での評価は古典的とさえいえるような発言が。

「ファッションは外面的なものであり、音楽はもっと内側からでくるものです。だから、音楽家がヴィジュアル的な側面を強調するのはあまり意味がないと思う」

そこで、かつてストラヴィンスキーが言った「コンサートで目を瞑ってはいけない」という言葉を引くと、すぐに「私はストラヴィンスキーに真意を申し立てたいと思います」と応えがえってきた。「目を瞑って集中するというのは当然あるでしょう? そうやって集中するひともいるんです。演



NAOHIKI FUWAKAGE

奏している姿で何かが伝わるというふうには、私はあまり思っていません。やはり内側からでくるものが音楽となるのですから」

では、モデルという仕事からは何も得るものがなかったのだろうか。クラシックの演奏家としてやっていくうえで、それはただの通過点でしかなかったのだろうか。

「いいえ、もちろんそんなことはないわ。人生において何か無駄になるようなことは、ないんじゃないかしら。つまらないことかもしれないけれど——ステージにでるときの歩き方とか、ポートレート写真を撮影されたりするときには、目をどこにやったらいいとか、いろいろ役にたっていることがあるんですよ」

最後に尋ねたのは、作曲や編曲について。最近、自分で曲を書く演奏家がふえてきた。あたかも19世紀に作曲家と演奏家の分離

がおきた、その事態を新しい世紀に向けて回復するかのよう。そうした流れと成る程度シンクロするところがあるのだろうか。

「作曲は特別に『いつから』始めたというわけではなく、ごくごく自然に、書きたいと、音楽を自分で作りたいという思いがあふれたときにやるのです。そういう意味ではインスピレーションを大事にするし、ロマン主義的なものもありません。アタマで作品をつくるのではなく、あふれてくるものが大切です。一方で編曲はといえば、もっと実務的なところからおこなっています。もちろんここでは作曲をすることで得た技術が役に立っているわけですが、何よりも、チェロのリパートリーをもっともっと増やしたい、広げたいというところからきているのです」

いい意味で音楽に対してとてもナイーブな、真摯な態度を示す二

ーナ。CDでの演奏でもそれは十分に伝わってくる。いわゆる「スタンダード」な大曲を彼女がどんなふうにも演奏するのか、いま、わたしは楽しみに待っている。

◎ 小沼純一

新譜情報



「ロマンティック・チェロ」
チャイコフスキー：夜想曲 変ハ短調/ラフマニノフ：ロマンス/ショパン：練習曲第19番 変ハ短調/フォーレ：エレジー/リャードフ：前奏曲 口短調。ほか ニーナ・コトワ (vc)、モスクワ室内管弦楽団/コンスタンチン・オルベリヤン
Philips [462 612-2] / 国内盤
[PHCP-11207] 2548円 (税込)